

自由応募分科会 2 「インドの産業発展と日系企業」

司会 絵所秀紀（法政大学）

報告 1 佐藤隆広（神戸大学）

報告 2 藤森梓（大阪成蹊大学）

報告 3 上池あつ子（神戸大学）

討論 佐藤創（アジア経済研究所）

近年、日本企業のインド進出が目覚ましい。在インド日本国大使館・ジェトロによれば、2008年10月時点での進出企業数・拠点数は550社・838拠点であったのが、2015年10月には1229社・4417拠点到まで増加している。この7年間で企業数でみて679社の日系企業が新規にインドに進出し、その拠点数をみると実に3579拠点数も増加している。国際協力銀行が日本の製造業企業に実施したアンケート調査によれば、インドは、インドネシアや中国を押しつけて2014年と2015年の2年連続、最も有望な事業展開先国としてみなされている。実際、インドは、2015年には景気後退にある中国を抜いて、主要国では経済成長率が最も高い国になっている。IMFによれば、その後、インドの成長率は7%台半ばから後半を推移し、2021年まで一貫して中国のそれを超えることが予測されている。これらのことは、世界経済における成長の極が東アジアから南アジアへと漸次移行するという壮大なドラマの幕開けを意味しているのだろうか。それとも、景気循環要因による成長率の一時的な逆転現象で、とるに足らない瑣末なエピソードに過ぎないのだろうか。

以上のように目覚ましい経済成長で注目されているインド経済を、その産業発展の特殊性と普遍性のみならずインド進出日系企業とその産業発展に果たしてきた独自の役割にも焦点を当てて実証的に分析することが、本分科会「インドの産業発展と日系企業」の課題である。佐藤隆広報告は経済産業省の個票データを利用してインド進出日系企業の実態を、新貿易理論にもとづく藤森梓報告はインド進出日系企業の特徴を東洋経済新報社の調査データを用いて実証的に分析している。これに対して、上池あつ子報告は、今年出版予定の研究書『インドの製薬産業：革新と模倣の融合』（ミネルヴァ書房）を踏まえてインドの製薬産業の現状を「革新と模倣の融合」というコンセプトを通じて解説する。